

STAT ～命を救うための技術と次の一歩～ 座長集約

新潟大学医歯学総合病院 能登 義幸
国立病院機構あきた病院 高橋 大樹

医療現場にて診療放射線技師がかかわるセッションにはそれぞれのSTATがある。STATとはラテン語で「緊急を」指し、STAT報告とは診療放射線技師間では「緊急性の高い所見を迅速に医師に報告する行為」として認知されている。令和3年9月30日に厚生労働省医政局長より通告「現行制度の下で実施可能な範囲におけるタスク・シフト/シェアの推進について」があり診療放射線技師が実施した検査画像に異常所見が認められた場合に、診療放射線技師が、その客観的な情報について医師に報告することは可能であると明記された。しかし、各施設の事情により積極的にSTAT報告に取り組めていない現状がある。それは、異常画像を読みとる読影力不足、病態の理解度不足、医師技師間による共通言語の理解度不足、勤務体制の不備など理由は様々である。また、適切な画像取得のための撮影技術が不足していることも考えられる。

今シンポジウムでは、緊急時にその場で何を考え、次にどう繋げるか、そのための基礎をしっかり学び、次の一歩にどう繋げるとよいかという点に重みを置き、各モダリティの第一人者である5名のシンポジストにご講演頂いた。

CT領域は、大田西ノ内病院 大原亮平先生にご講演頂いた。絶対に見逃してはいけない所見の報告体制の構築に尽力されている報告があり、スタッフ教育、モチベーション維持の取組等、3次救急施設ならではの課題を報告して頂いた。

血管撮影領域は、山形大学医学部附属病院 信夫章宏先生にご講演頂いた。IVR領域は医師とのコミュニケーションは重要であり、医師が使う専門用語を理解していないとその場の状況、医師の

考えが理解できないことがある。信夫先生には専門用語の解説、次の一手を予測できる技術、知識について講演して頂いた。

MRI領域は、弘前大学医学部附属病院 大湯和彦先生にご講演頂いた。急性期脳卒中患者は体動が激しく適切な画像が取得できないことがあるが、撮像部位固定の工夫、撮像パラメータ調整、撮像プロトコル選択を適切に行うことで良質な画像取得に努められていて、異常所見検出のための追加撮像も積極的に行っていると報告されていた。

放射線治療領域は、長岡赤十字病院 西潟貴幸先生にご講演頂いた。STAT報告とは異なるが、Oncology Emergencyとして緊急照射について、適応病態、適応疾患などを解説して頂いた。

一般撮影領域は、仙台徳洲会病院 吉田桃子先生にご講演頂いた。救急初療におけるポータブル胸部X線撮影は緊迫した状況下での撮影となる。その目的は、生命を脅かす胸部疾患の検出の他に、挿入デバイスの確認等、多岐にわたる。吉田先生には撮影のコツから救急診療の手順、他職種との役割等、チーム医療を意識した救急診療の概要を講演して頂いた。

診療放射線技師はいち早く画像を「見る」職種である。診療放射線技師が緊急性の高い所見を迅速に報告することは患者への早期医療介入を補助する重要な行為である。診療放射線技師は、適切なプロトコルによる撮影で情報を最大限に引き出し、画像を「診る」能力を研鑽して救急診療に従事すべきである。今シンポジウムが自施設でSTAT報告を行うきっかけになって頂けたら幸いである。